

八月二十六日

早朝まで嵐だったが、八時には落ち着いた天候になる。

八月二十九日

二十七日は午後、友岡社長と相談、アジアの紙ビジネス展開に
関して話す。彼はリアルな人だから、観念やら、コンセプトなん
て青くさい言葉は一切通じない。小林秀雄言うところの実際家そ
のものである。私の浮足だっているのが良く解る。二十八日は、
母のケアーに出掛けた。八十六才になる母のリアルさにも圧倒さ
れる。

今日は、夜、一人で左官職の為の、と言うよりも研究室の為の
プロジェクトをまとめようとす。いささか必死である。これま
でやってきたことの、現段階でのまとめだから。急ぎ足でやらね
ばならない。整理しながらの実感だが、我ながら、日本全国の左
官職、左官事業所のそれぞれをマア良く知っているなどと思う。思
い起こせば、杉山三郎、森田兼次他歴代日本左官業組合連合会会
長との附合いの時代、何処か、四国だったか、中部地方だったか、
もう定かではないが、組合員千人以上の、盃をやりとりした事も
あった。アレは気が遠くなるような体験であった。何しろ、全国
大会の参加者が千五百名程。日本全国からだった。それが大座敷
に一堂に会し、座敷の向う側も見えぬ位。その全員が盃と、一合
どっくりを持って、私が座らされていた上座にやってきたのだけか
ら。まともに呑んだら、死んでたなアレは。お流れちようだいの

流し酒だって、大オケに五杯位あったからね。そんな馬鹿な体験
があつて、四国の土佐に行ったら、若い十八才の職人が、父親が
世話になったと言つて、突然、銭湯で背中を洗い流してくれたり
の、泣けてくるような事もあつた。そんな歴史はチョツとでも生
かさねば、それこそ勿体ない。私が生きてる意味もない。日本の
左官職人達、盛時三十七万組合員、これは大工の全建連よりも、
はるかに巨大な組合だった。それが今は十数万組合員に減少した。
左官の組合は日本最大だった。これは本当は重要なんだ。ワレサ
の連帯の中枢は何であつたのか。大工職に何故、連帯、つまりユ
ニオンが実らずに、左官職に、日本最大の組合が出現した歴史が
あるのか。

ジョン・ラスキンがかつて言つた如く、そして、ウィリアム・
モリスがそれを継承して言挙げした如くに、愛情を込めてモノを
作る存在としての職人が消失した時に、その国の建築文化の一切
は消失する。建築家は居なくなつても良い。建築の原質は建築職
人なのである。建築家は消失しても、文化は消えぬ。しかし、リ
アルに、実に、実際にモノを作る職人が無ければ、建築文化は成
立せぬ。モノを組合わせるだけの設計者や現場労働者では、結果
としての価値を文化の領域に持ち込む事は出来ない。

私が呼ぶ職人は、いかなるスケールの現場でも、何らかの愛情
とプライドを注ぎ込む人達を呼ばざるを得ない。「職人」という
存在を、私は労働者と、少しだけ区別したい。これを中世主義者
と呼ぶのはシニシズムだ。今の建築のシニシズム的状况を乗り越
えるのには、これは大事なんだがなあ。